

# 子どもの心の成長に寄与するキャンプ実践 Practicing Organized Camp to Promote Psychological Growth in Children

西村 馨 NISHIMURA, Kaoru

● 国際基督教大学  
International Christian University

高橋 伸 TAKAHASHI, Shin


● 国際基督教大学  
International Christian University

木村 能成 KIMURA, Yoshinari

● 国際基督教大学 教育研究所  
International Christian University Institute for Educational Research & Service

那須 里絵 NASU, Rie

● 国際基督教大学 教育研究所  
International Christian University Institute for Educational Research & Service

 **Keywords** 組織キャンプ, グループセラピー, 心理的成長, 「自分」を出す  
organized camp, group therapy, psychological growth, emerging “oneself”

## ABSTRACT

本研究は、組織キャンプがどのように子どもの心の成長に貢献するのかを検討した。組織キャンプの専門家と不適応児のキャンプを実践する臨床心理学者とが共同して、キャンプの成長促進的な特徴を整理し、まとめた。現代において都市化された社会に生きる子どもたちには、人間が自然環境の危険を感知して反応するメカニズムを解発する経験が乏しい。自然の中での共同生活は、それを促進し、日常生活のしがらみから解放され、没入し、「自分を出せる」体験をもたらす。信頼関係の形成を踏まえて「自

分を出せる」経験をし、他者と本気でぶつかり合うという成長プロセスは重要である。そのためにキャンプは、社会適応のための有用性の概念から自由である必要がある。スタッフもまた、最大限自分を出し切る中で成長できる。組織キャンプとグループセラピーは本質的な部分を共有しており、今後子どもの成長に新たな視点をもたらすことが期待される。

This study examined how organizational camp contributes to children's psychological growth. An expert in organized camps and clinical psychologists who practice camps for maladjusted children collaborated to identify and discuss the growth-promoting features of camp. Children living in today's urbanized society lack the experience to release the built-in mechanism by which humans perceive and cope with danger in natural environment. This is facilitated through living together in nature, free from the constraints of everyday life and absorbed in the camp program. It also provides an "emerging oneself" experience. The growth process is crucial, where children, based on forming trustful relationships including clashes with others, experience "oneself emerging." For this reason, camp needs to be free from the concept of usefulness for social adjustment. Staff members can also grow in being themselves to the fullest extent. Organizational camp and group therapy share the same essential foundations and are expected to bring a new perspective to children's growth.

## 1. 本研究の目的

青少年の成長を助ける方法として組織キャンプ (organized camp) がある。これは、特定の目的を持って野外活動が計画され、指導者のもと、共同生活の中でプログラムが実施され、民主的運営がなされる。そのようなプログラム全体を通して、「全人教育」をねらうものである。いうまでもなく、学校教育における知的教育、教科教育の偏重への反省が背景にある。そして今や、組織キャンプの意義や方法論については、すでに様々な議論がなされ包括的な体系をなしている。

組織キャンプは、全人教育を目指す指導者によって構成される狭義のもの以外に、「教会キャンプ」のような、特定の青少年を対象とした、特定の目的を持ったキャンプが企画されることがある。その中には、児童、思春期の心身の発達に関心を持つ医療、福祉、心理、教育の専門家が運営するものもある。臨床心理学的な視点を持って、何らかの適応上の問題を持った子どもを対象としたキャンプは、児童心理治療施設や特別支援学級の年中行事として定着していることも少なくない。地域に根差した形でキャンプが行われることもある。また、東日本大震災の後、トラウマケア

やグリーンケアとしてキャンプが行われることも見受けられるようになってきている (小林, 2017)。

これらのキャンプの効果が様々に測定され、議論され始めている一方で、近年、効果概念についての問題提起がなされている。大間 (2017) は、組織キャンプの効果が、社会的な「有用性」の脈絡で検討されることへの疑問を呈している。また木村・那須・西村 (2019)<sup>1</sup>は、臨床心理学を基盤にした数年にわたるキャンプ活動の実践から、プログラム特異的な効果を超えて、キャンプという設定、環境、機会がもたらす心理・社会的成長を指摘しているが、それは、集団への適応という (見かけ上有益な) 効果とは別の、より「本質的な」成長であるという感触を持っている。大間も木村らも、キャンプという場における「自己の在り方」に、普遍的な意義を見出しており、それは、有用性とは別次元であるからこそ、より本質的な心理的成長をもたらすという指摘において共通している。そこには、参加者 (キャンパー) だけが成長するというのではなく、スタッフ (リーダー) の成長と相互性をなしていることも共通している。

そこで本稿は、組織キャンプの実践と臨床心理学的基盤を持ったキャンプ実践に共通する、心理的成長をもたらすプロセスの特徴を素描すること

を目的とする。著者らが、それぞれの実践を共有し、「子どもの心の成長に寄与する」要因について、特に重要と思われた共通要因を抽出し、まとめ、考察を加えた<sup>2</sup>。また、スタッフの成長についても同様の作業を行った。

本研究の主題は、系統的研究の難しい領域であり、十分な客観的資料を踏まえた議論となるのはまだ将来のことであろう。むしろ、これまでの客観的資料が、有用性という、社会的な望ましさを基準とした視点から収集されたものであることを反省する地点に立ち、キャンプを通して現れてくる変化の過程から、むしろ社会の歪みにかき消されてしまうことなく顕現した自己の姿に価値をとらえようとする、それを可能にする組織キャンプの設定、人間関係のあり方を、少しなりとも明確にしていくことを試みるものである。

## 2. 心の成長に寄与するキャンプの特徴

上述の方法によって抽出されたカテゴリーとして、大まかに以下の4つにまとめられた。4つ目はさらにいくつかの小カテゴリーを包含した。以下にその概要を述べる。

### 2.1 「自分を出せる」環境

キャンプでは、プログラムだけで一日が終わる。キャンプによっては、食事を自分で作る場合もある。そうになると、生活することそのものに没入することが求められる。しかしそれは大変なことというよりも、むしろ日ごろの緊張や束縛から解放するものである。家庭や学校では望ましい成果を挙げるのが期待されて、「良い子」であることが求められる。学校のルール、家庭のルールによる期待や指示に囲まれ、仲間からの暗黙、直接のプレッシャーにもさらされ、「やってはいけないこと」(平野, 2020) だらけである。キャンプという機会は、学業成績といった普段期待されているものから解放され、目の前にあることに没入すればよい。それは、「制約がない」「しがらみがない(日常の人間関係からの解放)」なかで、「自分を出せる」環境となる。それが、心の成長の基盤

の重要な部分であると考えられる。

そのような環境は、言い換えれば、人間関係における安心感に基づいているといえるが、いわゆる、障害児や心理的課題を抱えた児童のためのセラピューティックキャンプに限らず、よく構成された組織キャンプに備わった一般因子ではなからうか。

普段は我慢していることに思い切ってチャレンジしてみることを思い浮かべられるであろうが、チャレンジするのは「活動」だけではなく、普段我慢を強いられていて出せないでいる素直な気持ちを出して、行動してみる、ということにも及ぶ。バカバカしいこと、親しくなること、勇気を出して人と近づくこと、等々である。

その場合、指導者に期待されるのは、プログラムに必要なスキルの伝達ということのみならず、人間同士の信頼関係を構築していくことであるといえよう。それは、子どもとの信頼関係を基盤にしつつ、子ども同士の関係へと発展していくことを橋渡しする機能であるといえるだろう。この点については後に詳述する。

### 2.2 成果が求められず、興味のままだに楽しいことを追求できること

「自分を出せる」環境では、周囲からの期待から一定の距離を取って、自分の興味に没頭することを可能にする。キャンプでは、さまざまな活動プログラムが用意されているが、その中でも、それ以外の時間であってもかまわない。

火おこしに夢中になり、ずっと火を見つめる子ども、浮き輪に入り、ずっと川の水の流れに身をゆだねる子ども、何かを作り続ける子ども、それらは時間の許す限り、認められる。

あるいは、集団で遊び続け、例えば、果てしなく水遊びをし続けることもある。これらが、何かの役に立つというわけではない。社会適応を向上させる成果をすぐさまもたらすとは限らない。何かを学ぶわけでもない。だが、まさにその有用性のなさにこそ、子どもが最も生き生きする体験がある。

それらは、労働とは対極にあり、それ自体が人

を熱中させる、自発的なものであるという意味で、「遊び」と呼んでもよいかもしれない。心理療法における遊戯療法の意義とは別に、この「遊び」こそが、子どもの成長をもたらす重要な体験だという意見は近年ますます重視されている（Gray, 2013/2018；柴谷・森, 1996）。遊びの意義についての議論は他所に譲るが、ここでは、有用性や効率主義とは対極にある自発的熱中を妨げないことの意義を指摘しておきたい。

### 2.3 「本能」を呼び覚まされる経験

さて、キャンプが野外活動たるゆえんは自然体験をすることにある。自然体験をすることは、理屈ではない「非日常」の体験である。都市的、人工的な生活の枠組みを離れ、ある程度以上の「むき出しの」自然に触れ、その中で生活することは、誰に対しても大きなインパクトを与える。だが、そのような自然体験がなぜ、何に有意義なのかということについて、科学的説明が十分に行われているとは言いにくい。「『本能』を呼び覚ます」という表現はいささか非科学的な響きが否めないが、実践経験や観察、そしていくらかの文献を踏まえて、ある程度妥当なことと考えてよいのではないかと思われる。少なくとも、普段の私たちの生活は、テレビ、ラジオ、インターネットといったマスメディアに触れる時間の割合が大きい。近年では、SNSやネットゲームへの依存的没頭がしばしば問題になっているほどである。機械をにらむ時間をなくすだけでも、生活の感覚は大きく変わるであろうことは容易に想像していただこう。

本能というとき、必ずしも「動物的欲望」を意味しない。Gray（2013/2018）の説明を借りれば、むしろ、狩猟採集民として培ってきた生き物としての習性といったものに近い。すなわち、むき出しの自然に触れることで、狩猟採集民としての適応感覚が自然に喚起される（Grandin, 2005/2006）というべきだろうか。

人里を少し離れて、山の緑に囲まれた川や湖のほとりにいると、何かしらいろんなことをやりたくなる。その中には個人、集団での遊びもある。前述の、水辺での水遊びは学習によらないそれ自

体の楽しみを有している。また、狩猟体験や獲物を食べる体験も含まれる。実際の狩猟ではなくとも、アーチェリーや釣りは「本能的に」やりたくなる。火は自然に存在していることはまれであるが、それに魅了され、自分の生活の中に取り込もうとする傾向が人間にはある。また、前述の「火をじっと見る」ことは、誰にとっても独特の興奮と落ち着きをもたらすが、とりわけADHDの子どもを夢中にしやすい。そして、火を見続けることで、何かしら落ち着いていくことがしばしば観察されるが、いまだ説明は不可能である。

### 2.4 「群れ」の形成

組織キャンプでは共同生活が重要な構成要素となる。自分を出せる環境とも重複する事柄であるが、安心できる関係を基盤にして子どもたちの集団が形成されてくると、くつろいだ雰囲気の中にお互いを許容したり、反対に、遠慮がなくなってもめごとが大きくなっていったりということが生じてくる。

#### ①「信頼関係」の構築まで

児童期の場合、多くの子どものにとっては親から離れて生活することがほどほどにできるようになっており、仲間と遊ぶことが楽しいという体験をもたらすことが期待される（それゆえにこそ、キャンプが楽しいものになるわけだが）。だが、親との分離が不十分の場合、同年齢集団の中に溶け込めず、スタッフとしか関わらない子どももいる。彼らは、対人的な緊張が強く、社会的スキルが乏しいということがしばしばある。そのような場合、「勢い（force）の中に取り込む」ことが一つの可能性である。例えば、大勢で歌を歌うことが有効な場合がある。大合唱をしていると、自分の声を出していても恥ずかしくない。言い換えれば、「隠れながら関わる」機会を通して、少しずつ関わりを体験していくことできる。指導者、スタッフがさりげなく支えながら、その子のペースで他の子どもとのやり取りが展開していく工夫とゆとりが必要であろう。

#### ②遊びの援助

最初のうち、自発的に遊ぶことが難しかったり、

集団の中でどうしていったらいいかわからなかったりする子どもがいる。その場合、指導者（リーダー、スタッフ）が具体的なことプレゼンテーションして、子どもたちに意見を言わせ、関心を高め、できることに関与させていくという手順を取ることもある。子どもは、安心して関わることができると、リーダーに反発して、自主性や創造性を発揮することもある。

キャンプのプログラムは多様であり、幅広いスキルや知識が求められる。そのため、参加者個人のパーソナリティを生かした役割が見出されると、その特性が長所として認められる経験になることがある。野外ではADHDの子どもが元気いっぱい動いて、提案したり、世話役をやったり、推進者になったりということがあがるが、それくらいの元気さで「ちょうどよい」ということがある。また、対人関係が苦手なASDの子どもがカメラマンになることで他の子どもを注意深く観察したり、ファインダー越しに関わる機会を得たりということもある。そのように、子どもにできそうなことを提案し、動けるきっかけを与えることも有益である。

このような、安心感、信頼感が醸成され、自分を出せるようになるまで数日かかることが少なくない。キャンプの実施においては、対象の性質にもよるだろうが、この、信頼して自分を出せるようになることまでの時間を十分とれることが肝要である。

### ③関係を生き切ること、関係から学ぶこと

キャンプの中で安心感が育ってくると、プログラムへの取り組みが深いものになり、「遊び」が一層熱を帯びてくる。遊びは、現実でもあるがあくまで「遊び」であり、良質のふざけが活動を楽しめるものにする。また、本音のぶつかり合いが生じてくる。そのような関係性ができると、トラブルが生じるにしても、そこから学んで、生活の中で解消していくことになる。本気で叱って、ぶつかり合うことで、尾を引かずにスッキリ終わることが多くなる。

一方で、仲間関係の中でかなり攻撃的、搾取的な行動に出ることがある。その子どもがキャンプ

に参加することに強い不安を感じている場合、スタッフ、リーダーが気持ちを聞いてあげることが有効になりうる。一方、難しい日常を生きている子どもが、それをキャンプの中で再演していると理解できる場合もある。そのような場合に対して、平野（2020）は、精神分析家Michael Balintの「認識されることを目的とする退行」という言を引きながら、具体的な働きかけではない「理解と寛容」の意義を述べている。ただ、この「理解と寛容」は働きかけそのものを意味しないにしても、決して受け身的なものではなく、対峙的姿勢によって実現されることがある。

子ども同士のもめ事や子どもとスタッフのもめ事に対して、責任者が「村長」として対峙しつつ、責任をもって、ひとつの方針を示す時、それがうまく機能することがあった<sup>3</sup>。それは、ある程度「民主的」な集団が形成されているためともいえるが、キャンパーの集団が、「自分を出せる」群れになっていたからだ、という印象の方が正確に思われる。そういう雰囲気の中で、子どもが、大変なことをポロッと言うことがある。そのことが、子どもへの「理解と寛容」を促進させていくというのが臨床心理学的には理想的であるが、実際には大変困難である。

近年、年長者の薫陶を受けること、感化されることの意義が論じられることは少ない。それはともすると、主体的学びを妨げる因習的力であるにとらえられがちである。そのため、人からではなく、「理解を踏まえて合理的に動く」ことを求めがちななる（「譲ってあげなさい」、「お礼を言いなさい」など）。しかし、人間社会の倫理に関しては、理屈ではなく、集団のエートスを生の体験で学ぶことが必要である。Peter Fonagy（Fonagy & Allison, 2014）は、認識論的信頼（epistemic trust）やナチュラル・ペダゴジー（natural pedagogy）という、子どもが世の中の知恵を学んでいく際の要件を重視している。繰り返しになるが、自分を出せる信頼関係が成立したとき、指導者が伝えようとするのが初めて子どもに取り入れられるようになるのである。キャンプでの集団体験は、それを学ぶ良い体験となると考えられる。

#### ④異年齢集団における「世話をすること」

異年齢での構成である場合、年長の子どもが年少の子どもの世話をするという役回りが生じてくる。それらは、きょうだいのいない子どもや弟、妹として育ってきた子どもにとっては新鮮な体験である。一方、いつも家庭の中できょうだいの世話をしている姉妹にとっては、上の子の苦労を語り合う場になることもある。しかしいずれにせよ、キャンプが繰り返され、子どもが何度も参加していくものであれば、参加経験が多く、年長の子どもがリーダーシップをとって年少児、新参者の面倒を見ていくことが定着していくようになる。

それは、キャンプという企画そのものが成長していくことを意味している。スタッフも成長していくが、参加者も成長していき、新たな参加者を育てる「生き物」になっていくのである。

#### ⑤現実を変える実体験

そのような対人体験は、非日常的体験であるにしても、「現実的な」体験である。それまで、個人が内的に思い悩んでいたことがあったとしても、キャンプの中で試みることで実現したり、達成したり、発見したりすることがある。それは、心理療法のタイプで言えば「アクションメソッド」であり、大掛かりなロールプレイであるといってもよいかもしれない。

### 3. キャンプリーダー、スタッフの成長

子どもの変化、成長というだけでなく、キャンプはスタッフ、リーダーにも多大な成長をもたらす。そのことについて少しだけ触れておきたい。それは、スタッフのコミュニケーションの重要性に関する問題である。

キャンプを成功させるためには、スタッフと子どもの関係だけでなく、場合によってはそれ以上にスタッフ同士のコミュニケーションを緊密に行うことが重要である。スタッフ個人の経験量やパーソナリティによって、コミュニケーションが問題になる部分もあれば、キャンプのプロセスが進む中で必然的に生じてくる問題もある。

スタッフはそれぞれ、子どものために何か良い

ことをしようと思っている。だが、個人の、前提となる考え方や価値観が異なっているためにすれ違いを生じてしまうことがある。そのことをよく理解し合うための話し合いは不可欠であろう。

また、子どもの問題、プログラム運営の問題など、全体の流れの中に自分がまきこまれ、どうしようもなくなってしまう、泣き出してしまうくらいの情緒的危機を体験することもある。「一生懸命やっているのに、役に立っていない」と思って涙することもある。これは、個人の弱さによるものではなく、むしろグループを運営する際に必然的に生じることであり、これを経験して、腹を割って、自分の意見を語り合える関係を作ることが、スタッフ自身の「自分を出せる」成長体験である。切羽詰まった、土壇場の体験は、つらいものである。しかし、人間との直接的つながりの中で体験されると、全身全霊で生き切る体験になり、何らかの新たな地平をもたらす。それが「一皮むける」体験と呼ばれるものになる場合もある。

スタッフ集団が「自分を出せる」場になることは重要である。それは、子どもの「自分を出せる」体験の土台になるのだらう。そのような風土は、運営組織にも、また繰り返し参加する子どもにも蓄積され、継承され、育まれて、豊かなものになっていくと思われる。

心理臨床家の養成という点に言及するならば、個人の心を「個室」で受け止めるのではなく、共同体の中で受け止め、自分自身その共同体の一員として生きる体験は、将来、個別相談の専門家になる人にも有益であると思われる。

### 4. 考察

このように、キャンプの意義を子どもの心の成長の観点から振り返る時、人間の成長に関する重要な要素が逆照射されてくる。しばしば、人間の心の成長は、野性的なものを理性的なものによってどう統制できるかのプロセスだととらえられる。しかし、自然の中であって解発されるはずの心身の機構を用いないままに成長するようになっていることが、最も重大な危機であると考えられ

る。現代社会は、危険を回避して生活できるようなシステムを作り上げてしまった。だが、身体は動くようにできている、頭は感じるようにできている。身体を動かさずとも成長できるようになったのは、人間の歴史の中でごく最近である。その結果、「動物としての自然」と「社会的存在として習得することが期待されている事柄」との間に対立を作るようになり、その相克が人間の葛藤となって、成長を阻害していることが見えてくる。だが、通常の合理的、理性的な発想は、子どもを「社会の中にうまく適応する存在になる教育」をキャンプに求める。それが葛藤を繰り返す。むしろ、子どもが自然の中で、仲間とともに身体を動かすことそれ自体に意義があると言いたい。自然の中に自分が伸び伸びできるという感覚を育てることにこそ、「成長」に寄与するための自然の意義だと考えられるのである。これが、キャンプの意義が現代社会の求める価値尺度、有用性とは別次元にあるということの意味である。

念のため付言すると、キャンプの効果を量的に測定する意義を否定しているのではない。測定されたものの文脈を理解することが必要であることを指摘しているのである。近年のエビデンス重視の傾向は客観性を高める風土を培う一方、効果という概念を短絡的なものに限定する危険も有している。そのことを自戒する姿勢を持つておくことが肝要であろう。

組織キャンプの意義は、目的を持った野外活動が始まったころの理念と変わるものではない。むしろ、自然からの乖離による人間成長の困難の度合いがますます増していると言わねばならず、初期の理念の再評価をすべきであろう。

ところで、心理療法は、言わばフラスコの中で化学反応を起こさせようとする。一方キャンプは、生活全体で、支援者もまた全体の流れの中において、全体のプロセスの影響を受ける。フラスコに収まりきれないものを扱う。いや扱うというより、一緒に生きることで得るものを見出そうとするところに特徴があらうか。いずれにせよ、こういう体験は、将来フラスコを扱う人にとっても有益な体験になると考えられる。

組織キャンプの理論は臨床的集団精神療法の理論と共通の基盤を持っているように考えられる。それらは20世紀の前半に枝分かれして発展していったが、人間集団の潜在力にそれぞれの領域からアプローチしていたということだろう。子どもの成長を論じるとき、より広い、多面的視点でとらえ、根本的な部分を開発する方略を検討することが期待される。

本稿においては、キャンプが、子どもの成長を促進するプロセスを素描した。キャンプは、自然環境があり、日常の束縛やマスメディア、デジタル機器から離れて、プログラムに没入しようとするところから始まる。しかし、真にプログラムが意味を持つのは、安心感がもたらされ、自分を出せるようになってからである。そしてそこで、これまで思い描いていた自分の殻を破る新たな現実を作り出すが、それはしばしば抜き差しならない限界状態に追い込まれたところから生まれたり、それを理解されたりする体験から生じたりする、とまとめられる。つまり、日常の中で育てられていない、使い切れていない部分（機能）を、自然環境の中で、キャンパーの共同生活によって、精いっぱい使うところにそのエッセンスがある。キャンプに参加する子どものみならず、リーダー、スタッフもまた、子どもとのやり取りの中で、また同僚との関係の中で切羽詰まった体験をすることになる。それが新たな地平を開く。忘れてはいけないのは、そのプロセスは、役に立たなさそうな、有効性とは無関係の体験が豊かにあることから生じるであろうということである。なんからの問題を抱えてキャンプに参加した子どもの場合、それを解決すること自体は不可能である。だが、キャンプに参加して「群れ感覚」を育てる／取り戻すことは可能であろう。自然と群れの中でプログラムに没入することは、「自分」の感覚を養うことに大きく貢献するであろう。

## 注

- 1 本論文の著者のうち、西村、那須、木村は、児童、思春期の臨床的グループセラピーを実施し、そのグループへの参加者とその家族を中心とした野外キャンプを展開してきた。キャンプの参加者は、

不登校を含む学校不適応児，発達障害児に限らず，発達上，適応上大きな問題のない「普通の」児童もいた。そこから，表面に現れた問題への対処だけでなく，現代の子どもの発達を難しくする共通の環境要因への関心を深めてきた。

- 2 ICUにおいては，初代保健体育科三隅達郎が学生の全人教育ために組織キャンプに積極的に取り組んだ。それが，1956年に始まった野尻キャンプである。後に学生による運営へとその形態を変えた。本論文の第2著者高橋は，野外活動，リクリエーションを専門とし，この野尻キャンプに，長年にわたりかかわってきたほか，大間哲とともにICUジュニアキャンパスキャンプを企画運営した。
- 3 西村馨（2020）日本思春期青年期精神医学会第32回大会ワークショップでの発言。思春期青年期精神医学, 30(1), 36.

## 引用文献

- Fonagy, P. & Allison, E. (2014). The role of mentalizing and epistemic trust in the therapeutic relationship. *Psychotherapy, 51* (3), 372-380. <https://psycnet.apa.org/doi/10.1037/a0036505>.
- Grandin, T. (2005). *Animals in translation: Using the mysteries of autism to decode animal behaviour*. Bloomsbury Publishing PLC. 中尾ゆかり訳(2006). *動物感覚——アニマルマインドを読み解く——* NHK出版
- Gray, P. (2013). *Free to learn: Why unleashing the instinct to play will make our children happier, more self-reliant, and better students for life*. Basic Books. 吉田新一郎訳 (2018). *遊びが学びに欠かせないわけ 自立した学び手を育てる* 築地書館
- 平野直己 (2020). コミュニケーションに課題を持つ子どもたちにとっての支持的な環境——フリースペースと親子キャンプでの実践を通して—— *思春期青年期精神医学, 30* (1), 17-25.
- 木村能成・那須里絵・西村馨 (2019). 児童・思春期の子ども達を対象とした野外キャンプの取り組み——子どもの成長する力に着目して—— 日本集団精神療学会第36回大会 2019年3月10日.
- 小林正幸 (2017). みどりの東北元気キャンプから熊本支援に学校メンタルヘルス, *79* (2), 20-21.
- 大間哲 (2017). “切り捨てのない社会”を創るための“発達のパラダイム”からの転換——組織キャンプリーダー経験者の語りに見る有用性のみで評価しないことの意義—— 法政大学大学院 キャリアデザイン学研究科キャリアデザイン学専攻 修士論文 (未公刊).
- 柴谷久雄・森楸 (1996). *新版 遊びの教育的役割* 黎明書房